

ゴリキーの運命上

「ローキー」の運命 上

その時代と文学

ボリス・ビャーリク著
山村房次訳

新日本出版社

原著名 Судьба Максима Горького

著者名 Борис А. Бялик

山村 房次 (やまむら ふさじ)

1908年生まれ。日ソ協会常任理事，日本民主主義文学同盟幹事。

主要著訳書 『ロシア文学史』(ゴーリキー，岩波文庫)，『文学入門』(ゴーリキー，青木文庫)，『人類の教師・ゴーリキー』(グルーズジェフ，明治図書)，『ゴーリキー短編集Ⅰ』(青木文庫)，『ゴーリキー研究』(啓隆閣)，『冬の峠』(ドラブキナ，新日本新書)，『壊滅・氾濫』(ファジェーエフ・共訳，新日本出版社)，『黒海の波』(カターエフ，新日本出版社)，『マルクス・レーニン主義美学の基礎』(編・訳，啓隆閣)，『歴史小説論』(ルカーチ，青木文庫)，『マルクス主義文学論』(共著，汐文社)など。

ゴーリキーの運命——その時代と文学 上

1975年3月30日 初版

著者 ボリス・ビャーリク

訳者 山村 房次

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 102 東京都千代田区富士見 2-13-14

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (265) 7 0 0 6 (営業)

(265) 2 0 7 5 (編集)

振替番号 東京 3-13681

印刷 鎌倉印刷株式会社 製本 古賀製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします

ゴ ー リ キ ー の 運 命

その時代と文学
上

凡 例

一、本書は、Б. Былик: “Судьба Максима Горького”, Издательство «Художественная литература», Москва 1968. (ボリス・ビャーリク著『マクシム・ゴリキーの運命』、芸術文学出版所、モスクワ一九六八年) による全訳後に入手した一九七三年の同書第二版と対照し、補足と省略部分を第二版によって修正したものである。

二、本文および注においても、() 内にあるものは原著者によるものである。

三、本文中短い訳注はすぐその下の「」内に入れたが、長くなるものは*印を付し、本文の段落末に「」内に入れて示した。

四、原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点をつけた。

五、レーニン全集からの引用文は、原書ではレーニン全集第五版によってページ数が示されているが、読者の便宜を考えて、大月書店版の『レーニン全集』を参考にしうるよう第四版のページ数に直して示した。第五版の場合は原書ページによる。

六、外国人名、地名、新聞名などの表記法は、日本新聞協会編『新聞用語集』の例によった。

七、下巻の巻末に付した人名、書名・作品名索引は主要なものに限定した。

目次

凡例

著者まえがき 7

第一章 遍歴者 17

第二章 一八九二年 45

第三章 「拒否されたというよりも、むしろ拒否した人びと」

第四章 あたえるのか、とるのか？ 133

第五章 海ツバメ 199

第六章 真のヒューマニズムと、偽りのヒューマニズム

第七章 一九〇六年 295

249

下巻目次

第八章 「環境——それはわれわれである」

第九章 革命と革命のあいだ

第二〇章 「わたしはこの地上で孤児ではない……」

第二一章 レーニンとゴークー

第二二章 「同志諸君、あともどりはない……」

第二三章 主要な敵

第二四章 太陽の値段は？

第二五章 マクシム・ゴークーの偉業

エピローグ

訳者あとがき

索引

著者まえがき

自分の自覺的な生活のこれまでのほとんど全期間——三五年以上、わたしはアレクセイ・マクシモビッチ・ペシコフ（マクシム・ゴーリキー）の生活と創作を研究している。あるテーマにたいするこのような愛着は、ただ偉大な作家の作品にたいする愛情からだけではない。おどろくべき、伝説的な運命の人の個性にたいする興味からだけではない。わたしはゴーリキーを世界の文学過程の中心的な人物、また二〇世紀の中心的な、もっとも大きな、もっとも特徴的な人物のひとつと考えている。これは——一つのテーマではなくて、そのそれぞれがひじょうに教訓的な多くのテーマである。

ゴーリキーの運命は、それ自体としても、またそれを透して見れば、われわれの時代の芸術的發展と全精神的發展の重要な諸側面をいっそうよく見ることのできる「魔法の水晶」としても、注目すべきである。そればかりではない。この水晶を透して見れば、人類の歴史からその真の歴史への悲劇的な、美しい転換期におけるひじょうに広範な人民大衆の運命がよりよく見えるし、よりよく理解できる。わたしは本書でこのことを語りたい。

一冊の本でこのようなテーマを、もっと正確に言えば——このような諸テーマを包括することが

できるだろうか？ もちろん、不可能である。これらのテーマは、世界のすべての言語で書かれているゴーストリーにかんする何百という本、何千という論文においてさえも完全には包括されていない。そしてこのことは、おどろくに値しない。

かれ自身が幼年および青年時代の苦しい経験について自分の諸作品のなかでじつにみごとに物語っているし、また多くの興味ある重要なことがその後さらに明らかにされたし、いまでも明らかにされつつある。生活の最「下層」から文化の高みにまでたどりついた多くの青年がその途上で出くわしたありとあらゆる障害が、アレクセイ・ペシコフの人生途上に集中するようにと、現実がとくに心をくばったかのような感じさえもする。かれのロシア遍歴はまったく苦悩の遍歴だった。だが、かれが（人びと、および自分自身にたいする幻滅と、自殺の試み（一八八七年二月）のあと五年後に）作家となったとき、はたしてかれの運命は前に比して事件にとぼしくなっただろうか？ それとも、かれのもとに（さらに一〇年後に）全ロシア的および全世界的な名声が訪れた後には？ かれの逮捕（一八九八年五月）は中編小説『フォマー・ゴルジュエフ』（一八九九）の執筆を中断させたし、つぎの逮捕（一九〇一年三月）は戯曲『小市民』（一九〇一、ゴーストリーのさいしょの戯曲）の執筆をさまたげた。戯曲『どん底』（一九〇二）はアルザマスの追放地で、戯曲『太陽の子ら』（一九〇五）はペトロバブロフスク要塞監獄で書かれた。さらに郷里の市で、すでに有名な作家だったゴーストリーの胸に突き刺された、だが、ただ幸運な偶然によって命拾いをした（懐中時計が身替りとなった）反動の七首を、またアメリカにおける敵意にみちた追い出しキャンペーン（一九〇六）、祖国から遠くはなれた土地での余儀なくされた長期滞在……を思いおこそう。

しかし問題は、ゴリキーの人生途上で生じた「外面的」な障害や危険だけにあるのではない。かれの内面的——思想のおよび創造的な——発展の歴史は、それに劣らず困難で、複雑なものだった。かれは一八九六年に自分の婚約者エカチェリーナ・パープロブナ・ボルジーナ（一八七六一一九六五、結婚後はベシコワ）に、かれおよびかれとともに歩むすべての人にとって避けることのできない苦しい試練を予告して、つぎのように手紙している——「カーチャ（エカチェリーナの愛称）、生活において一般にうけいれられている真理とはまったく異なった、自分の真理をわたしはもっている。そして、わたしは自分の真理のために多くの苦しみをなめなければならぬでしょう。なぜなら、それはそうすばやく理解されず、わたしはその真理のためにながいこと嘲笑されるでしょうから」。まだマルクス主義者となっておらず、社会主義思想にまで高まっていなかったゴリキーは、当時「自分の真理」について語る権利をもっていたらうか？ もちろん、もっていた。なぜなら、かれはすでに自分の全体験から、経験した多くの感情から、専制政治にたいして、人間による人間の抑圧にもとづいた全社会「秩序」にたいして、内面的および外面的れい属のありとあらゆる形態にたいして、大胆に、徹底的にたたかう必要があることを確信していたからである。かれはこの真理をつかんだ、そしてその後けつしてそれから立ち離れることはなかった。この真理は人民大衆の自覚の増大とともに、全現実の発展とともに発展し、豊かになり、成長した。

このまったく困難な上昇の時期に、ゴリキーは動揺とあやまりを経験した。それらを思いおこすことは教訓的である。これらの動揺とあやまりの克服の歴史は、共産党が、党の生みの親で指導者のV・I・レーニンがかれの運命にどのような巨大な役割を演じたかをしめしている。党とレー

ニンハ、ゴリキーの自主的な、まず第一に自分自身の生活体験によって示唆された真理の探求においてかれを助けた。ゴリキーのこれらの探求を、かれの時代の理論的、科学的、哲学的思想の最高峰と対比するだけでなく、またかれ自身がその表現者だった社会勢力の精神的な成長とも対比する必要がある。初期におけるかれのマルクス主義への道、およびもっと後の時期の社会主義的立場でのかれの確信——これらのすべてが、一方では、かれの芸術的探求の特殊性の、他方では、ロシア・プロレタリアートの発展の特殊性の刻印をおびていた。

ゴリキーの偉大な友人であるレーニンは、正しい立場からのゴリキーの逸脱をつねに公然と率直に批判していたが、同時に、けつしてかれをプロレタリア芸術家と見なすことをやめなかった。作家のひじょうに重大な政治的あやまりのときにさえも、レーニンは「プロレタリア芸術の文句なしに最大の代表者であるゴリキーは、プロレタリア芸術のために多くのことをなしたし、さらにもっと多くのことをなしうる」（全集、第一六卷一八六ページ）、「ゴリキーは全世界のプロレタリア運動に多くの利益をもたらしたし、またこんどもたらす巨大な芸術的才能である」（全集、第二三卷三二五ページ）と語っている。

ゴリキーの運命は、それが世紀のもっともすぐれた人びとの運命と、また専制主義と反動の時代だけでなく、三つの革命の時代——そのうちのさいしょの革命はロシアを、第二はヨーロッパを、第三は全世界をうちゆるがした革命の時代——をも経験してきた祖国の運命とからみ合えばあうほど、より大きな意義をもつにいった。十月革命後、ゴリキーはおそらくかれの生涯においてももっとも充実した、もっとも重要な、——そしておそらく、もっとも豊富な芸術的発見の二〇年

間をさらに生きとおすことになった。

芸術家としてのゴースキーは、たえず運動のなかに、たえず革新の過程のなかにあった。一九二六年にかねは自分の新しい短編について意見を聞きながら、K・A・フェージン（一九二二、長編『都市と年月』（一九二四）の作者）につぎのように書いている——「この作品のなかになにかゴースキー的でないものが感ぜられるかどうかを知ること——わたしにはきわめて興味ぶかく、また有益なことだと思えます。これは——わたしにとっては重要な問題なのです」と。このときゴースキーの創作は、新しい芸術的特徴をもった自分の新しい段階にはいりつつあった。しかしかれの創作のなかに、なにか「ゴースキー的」でないもの、古い、以前のゴースキーのものでないものがあらわれた、そのような時期はこれまでにすくなくあつた。

一八九〇年代の諸短編のあと、新しい主人公と、古い主人公にたいする新しいアプローチをもったかれの初期の戯曲は、ゴースキーのものとしてはどのような思いがけないものに見えたことだろう。作者とおなじ思想をもったある人たちによってさえも、主として宣伝的な、「教育的」な意義をもった作品として評価された小説『母』（一九〇六）は、第一次革命の時代に多くの批評家を同様に当惑させた。のちの中編小説『オクロフ町』（一九〇九）的系列の諸作品、およびその他の諸作品も、おなじく思いがけないものに見えた。このさい、そのたびごとに「ゴースキーの終末」という言葉が語られ、そしてそのたびごとに、それは終末ではなくて、はじまり——新しい探求と新しい発見のはじまりであることがわかった……

いや、多くの問題と諸事件にみちた運命については一冊の本では語ることはできない。これらの

問題と事件の、けっして完全なものとは言えない一覧表だけでも、部厚い四巻の本をなしている『A・M・ゴリキーの生活と創作年代記』。芸術家としてのかれの形成期にゴリキーの妻であった「二九〇六年ごろから別れている」、そして生涯のさいごまでずっとかれの友人、誠実な助手であったエカチェリーナ・パーブロブナ・ペシコワは、あるときわたしにこう語った――

「アレクセイ・マクシモビッチのおかげで、わたしは限りなく多くのことを見、かつ知ることができました。ときどき、わたしにはこんなふうに思えるのです――わたしは一つの生涯ではなくて、いくつかの生涯を送ってきたような、そしてその生活はおどろくほど興味ぶかいものだった、と……」

ゴリキー自身については言うまでもない！

もしわたしが、「マクシム・ゴリキーの運命」という言葉のなかにふくまれている内容がいか
に広く、かつ複雑なものであるかを理解しているとすれば、なぜ自分の著書にこのような題名をつけたのか、といった質問が起るにちがいない。もっとも短い概観の形式にしる、この作家の生涯と創作の道を包括しうるなどとは考えていない。

このようなだいたいそれた考えを、わたしはじっさいもっていない。わたしはかれの生涯の多くの重要なエピソードにただちょっと触れるだけであり、特別の、全面的な分析に値するかれの多くの作品の名前さえもあげていない。主要なものと思われるかれの個性と創作について、かれの労苦の多い、そして先例のない運命のもっとも重要な特徴について語るといふ、はるかにつましい課題を自分に立てている。

このさいわたしは、ゴリキーについて書いているすべての人びととおなじく、ゴリキーの生活と創作にささげられた大きな学術的文献を利用することができる。ゴリキーの思想的および創作的発展の正しい理解の基礎は、すでに十月革命前の時期にマルクス主義批評の代表者たちによって据えられた。レーニンのゴリキーについての意見は決定的な意義をもっていた。ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所とソ連邦科学アカデミー、A・M・ゴリキー記念世界文学研究所によって準備され、そしてすでに第二版（あらたに補足された第三版は目下準備中）（一九六九年に出版）されている）の出てくる文集『V・I・レーニンとA・M・ゴリキー』（手紙、回想、文献）のなかでひとつにまとめられているこれらの諸見解は、偉大な言葉の芸術家ゴリキーの思想的探求の基本的な諸段階を包括する整然たる見解の体系をしめしている。ゴリキーの多くの作品は、G・V・プレハーノフ（一八五六一一九一八）、F・メーリング（一八四六一一九一九）、ドイツの文学理論家）、A・V・ルナチャルスキー（一八七五—一九三三）、V・V・ボロフスキー（一八八一—一九二三）、S・G・シファウミヤン（一八七八—一九一八）、その他のマルクス主義的批評家たちの論文のなかで評価されている。

ゴリキーの生活と活動の個々の側面の綿密な文芸学的研究は、ソビエト時代に一連の学者——S・D・バルハートゥイ、I・A・グルーズジェフ、V・A・デスニーツキイ、S・V・カストルスキー、B・V・ミハイロフスキー、K・D・ムラートワ、N・K・ピクサーノフ、E・B・ターゲル等々の労作のなかではじめられた。この名簿はモスクワ、レニングラード、ゴリキー、カザン、クイプイシェフ、トビリシ、エレワン、キーエフ、タシケント、その他のわが国の諸都市の多

くの文芸学者の名前（ゴーリキー研究の諸労作、編集、「紀要」の出版されていないような文化センターの名をあげることは困難である）によって、またドイツ民主共和国、チェコスロバキア、ブルガリア、および社会主義共同体のその他の諸国の文芸学者の名前、および資本主義諸国の進歩的な学者と文学者の名前によって補充することができるだろう。一九世紀末および二〇世紀のさいしょの三分の一の期間の文学の歴史、またそれとともに——もっとも関心の的である現代にむけられた多くのゴーリキー学がすでに存在していると言えよう。ゴーリキーとかれの創作をめぐる闘争は、多くの国でいまも静まっていない。ときにその闘争は、すでに一九〇五年にアナトール・フランス（一八四四—一九二四、フランスの小説家）のおこなった——「ゴーリキーのような人は全世界のものだ。そして全世界はかれの擁護に立ちあがらなければならない」（一九〇五年の一月九日の「血の日曜日事件」）に関連してゴーリキーが逮捕・投獄されたとき、ロシア政府にその釈放をもとめて発表された声明」という声明が、思わず思いだされるほどの、はげしい性質をあらたにおびている。

ゴーリキーのさいごの道を見送りながら、アレクセイ・トルストイ（一八八三—一九四五、三部作『苦悩の中をゆく』の作者）はその告別式で、レーニン廟から感動的な言葉を語った——

「ゴーリキーのような、歴史の革命的時代を深く、正しく反映する芸術家には、レーニンのような、解放された世界を創造するために人類をみちびく創造者には——これらの偉大な人びとには、歴史におけるかれらの存在の二つの日付け——、誕生と死ではなくて、ただ一つの日付け——かれらの誕生だけがある」と。

すべての進歩的な人びとが記念する注目すべき日付け——マクシム・ゴーリキー生誕一〇〇周年